

* 「御霊の実」の最後の3つ「誠実」「柔和」「自制」は自分自身に関する資質と考えることができる。

1. 「誠実」。この原語は「信仰」と訳されていることも多い。「誠実」は自分に対しても人に対しても心と行いに偽りがないことと言える。この世の中で成功しようと思ったら誠実に生きてなんかいられないからなのか、誠実と真逆のニュースがどれほど多いことか。新約聖書で「誠実」な人物の典型はナタナエル。彼は主イエスに「これこそ本当のイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」(ヨハネ1 : 22)と言われたほどである。彼は12弟子のバルトロマイであると考えられている。

2. 「柔和」。元の意味は、自分を神の貧しい「しもべ」として神に従うこと。隣人に対して怒りや傲慢な思いを抱かない人のことである。「謙遜」と同じ意味と考えてよい。聖書の中で「柔和」な人物の代表はモーセである。(民数記12 : 3参照) また、パウロも「キリストの柔和と寛容をもって、あなたかたにお勧めします。」(IIコリント10 : 1)と言っている。

3. 「自制」。聖書では通常、性的な事柄における自制を指す。自制できないとき、「肉の行い」である不品行、汚れ、好色、酩酊、遊興、などが現れる。また、憤りも自制と関係がある。罪に支配されやすい私たちの日常生活は「自制」の連続かもしれない。「また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」(Iコリント9 : 25)「自制」は神様からいずれ義の栄冠を受けるために必要な徳であることがわかる。

* 「このようなものを禁ずる律法はありません。キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまな情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」(ガラテヤ5 : 23~24) 9つの御霊の実を禁じている律法はない。御霊の実ができることが律法を守っていることになる。逆に律法を守ろうとする自分の努力で御霊の実を得ることはできない。キリストの十字架が自分の罪の赦しのためであったと信じる者は御霊が働いて良い実ができていくのである。御霊の実の9つはすべて神様の持つておられるご性質である。だから、御霊の実ができていくことが自分の中に、或いは隣人の中に認められれば、その人はイエス・キリストに似てきているということになる。

* 「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」(5 : 25) 御霊にゆだねて生きるなら、必ず神様の喜ばれる実ができる。しかし、一挙にはできない。一歩ずつである。忍耐と祈りをもって進もう。